



2009年6月17日放送

漢方頻用処方解説「八味地黄丸」②

北里大学東洋医学総合研究所 漢方診療部 副部長 早崎 知幸

<現代における使い方>

泌尿器科領域では、様々な排尿に関するトラブルに応用されます。特に前立腺肥大に伴って起こる夜間頻尿、尿に勢いがなくなる、切れが悪くなるなどの症状には第一選択薬です。男性では ED のような性機能障害にも用いられますし、女性では老人性膣炎などにも効果が認められます。

腎疾患では、経過が長引き、抗病力や免疫力の低下を背景にもつものに使用されます。軽度の浮腫や蛋白尿、血尿、腎性高血圧、老化に伴う腎機能低下に用いられます。また、ステロイドの長期投与者にも応用されます。

内分泌・代謝領域では、糖尿病に、胃腸が丈夫であれば第一選択薬となります。下肢の冷えやほてり、夜間尿などがあれば使用しやすく、糖尿病性腎症などの合併症の予防にも応用されます。

呼吸器領域では、気管支喘息で、ステロイド依存性のものや、麻黄剤が使いにくいような高齢の喘息患者に用いられます。「EBM に基づいた喘息治療ガイドライン 2004」では、「高齢者の喘息には腎虚の病態があり、補腎剤である八味地黄丸などの適応が有用である」と記載されています。

循環器領域では、高齢者の高血圧にも用いられます。脈状や検査所見から動脈硬化が進行しているものによいとされます。

整形外科領域では、腰痛で、骨粗鬆症などの老化に伴うものに用いられます。動脈硬化による血行不良によって起こる下半身の冷えや、脱力を伴う場合によく使用されます。

眼科領域に関しては、「科学的根拠に基づく白内障診療ガイドライン」に、「白内障の薬物療法については、内服のうち漢方薬では八味地黄丸と牛車腎気丸が適応がある」と記載されています。（ただ、ランダム化比較試験がなく有効性は明らかではないことも併記されています。）

<EBM>

八味地黄丸は臨床効果が幅広いため、基礎・臨床研究も様々な角度から行われています。ここでは現在得られている絵美田巢の一部を紹介します。

泌尿器科の関連では、有地らは、高齢者で夜間排尿量および回数の多い症例に八味地黄丸を投与すると、コルチゾル、ACTH、バソプレッシンの分泌のリズムが正常化され、夜間排尿量、夜間排尿回数の減少が観察されることを報告しています。吉田らによると、前立腺肥大患者 35 例に八味地黄丸エキスを投与し、排尿に関する自覚症状に関しては、やや改善以上が 77.1%で、残尿測定と尿流量測定による他覚的所見では、やや改善以上が 40%であったことを報告しています。坂本らは、男性不妊に関連したラットの実験で、八味地黄丸が男性ホルモン存在下では抗男性ホルモン作用を示すことを報告しています。

内分泌・代謝領域では、ヒロタニらが、八味地黄丸がストレプトゾトシン誘導性糖尿病ラットの高血糖に及ぼす効果を検討し、インスリン合成と分泌を増加させるだけでなく、肝臓の GLUT2 タンパク質発現を正常化して、血糖値を抑制することを報告しています。

整形外科領域では、林らが腰部脊柱管狭窄症に対する八味地黄丸の効果を、非ステロイド抗炎症薬とのランダム化比較試験を行って検討しています。有効率は 68%であり、非ステロイド抗炎症薬のプロピオン酸に比べて有意に優れていることが示されました。嶋田らは、随証治療による検討で、四肢の冷えやしびれなどを訴える高齢者に対する有効性を報告しています。

脳神経・循環器領域では、伊藤らが、四肢の冷え、下肢痛、しびれなどの諸症状を有する高血圧症患者と脳血管障害患者 103 例に対して、cross over 二重盲検法で検討し、70%の改善を示し、プラセボと比較して有意に優れていたことを報告しています。岩崎らは、認知症に対する有効性を、二重盲検ランダム化比較試験で行っており、認知症患者の認知機能、日常生活動作、内頸動脈の血流が改善したことを報告しています。

<処方適用のポイント>

大塚敬節の『漢方診療三十年』に「八味丸の覚え書」という記載があり、わかりやすくまとめているので、一部抜粋して引用します。

○八味丸は腎気丸と呼ばれている通り、腎の機能を強化する作用がある。ここで腎というのは東洋医学でいう少陰腎経のことで、今日の腎より更にその範囲が広い。(例えば耳鳴りに八味丸を用いるのは、耳は腎経に属するからである。また腎と肝とは密接な関係にあるから、八味丸は肝の機能を強化する効もある。そこで肝経に属する目の病気である白内障や網膜炎などにも用いられる。)

○八味丸を用いる目標は、腹証上では少腹拘急と臍下不仁との二つの型がある。

○尿が出すぎる場合にも、尿が出ない場合にも、ともに八味丸を用いる。また夜間の多尿にこの方がよく用いられる。

○口渇と手足の煩熱もまた八味丸を用いる目標であるが、これらの症状を訴えないものもある。

○八味丸を与えると、下痢を起こしたり、食欲が減退したり、吐いたり、腰痛を訴えたりするものがある。これは八味丸の主薬である地黄のためと思われる。だから胃腸の弱い人には、注意して用いるがよい。

以上のようにうまくまとめてありますが、臨床応用はあまりにも範囲が広いため、症状にこだわってはいかえって使いづらい面があります。そのため、個人的には、患者の訴えが加齢に伴って起こった症状だと考えられた場合に用いると、奏功することが多いのではないかと考えています。下半身の機能低下を伴うと、さらによく効く可能性があります

<類方鑑別>

まず挙げられるのは牛車腎気丸です。

これは、八味地黄丸に、利水の働きのある車前子と、諸薬を下焦に導く引経薬である牛膝を加えたものです。そのため、腎の陽気が不足した病態は同じですが、浮腫傾向やしびれを伴うものに使用します。

次に六味丸ですが、これは八味地黄丸から桂枝と附子を去ったものです。同じ腎虚ですが、八味地黄丸が腎陽虚であるのに対して、六味丸は腎陰虚になります。また、八味地黄丸は高齢者に多く使用されますが、六味丸は小児にも応用されます。

真武湯は、新陳代謝が低下している体力虚弱な人で、全身倦怠感、冷え、めまい、下痢などの症状を訴える場合に使用します。新陳代謝の低下を副腎機能の低下と考えると、冷えやめまいなどは腎虚の症状と言えるため、この点では八味地黄丸と同じです。違う点は、真武湯は加齢による脾虚、つまり胃腸機能が衰退し、消化・吸収・同化の働きが低下している状態で、このために下痢などの症状を起こしていることです。

(体質傾向としては、顔色は青白く、無力性体質です。また、胃腸が弱く、冷えに敏感で寒冷刺激で臨床症状が起こりやすい傾向にあります。)

<自験例>

最後に典型的な症例を1例紹介します。

症例は 73 才の男性。主訴は腰痛です。5 年位前から、疲れると腰が痛くなるようになり、ここ 1 年は疲れやすくなり、腰の痛みも持続するようになって整形外科を受診しました。そこでは特に異常なしと言われ、湿布を処方されて様子を見ていましたが、改善しないために来院しました。自覚的には 5 年位前から夜間頻尿になり、泌尿器科で前立腺肥大を指摘されて投薬を受けましたが、夜間頻尿は変わらず 3~4 回トイレに起きるそうです。他には、足先に冷えと膝から下の違和感がありますが、むくみやしびれは認めません。胃腸は丈夫とのことでした。

漢方医学的所見ですが、舌はやや乾燥していて紅(ベニのコウです)、脈は沈、腹診所見は、腹力は中等度で、小腹不仁を認めました。夜間頻用と足の冷え、黄痛を訴え、小腹不仁を認めたため、腎虚と考え八味地黄丸料を処方しました。

服薬 1 週間後に一旦腰にこわばるような違和感が出現しましたが、膝から下の違和感は少し改善していたので服薬を続けてもらいました。その後腰のこわばりはなくなり、4 週間後には、腰痛も軽くなってきました。3 ヶ月後には腰痛、足の違和感、冷えなどの症状は 9 割方改善しました。また、この頃には身体のだるさも取れ、疲れにくくなったとのことでした。4 ヶ月後には足腰の症状はほとんどなくなり、夜間尿も 3~4 回から 1 回位に減ったため、以後服用量を半分にして服薬してもらうことにしましたが、その後も経過良好です。

以上、八味地黄丸についてお話ししてきました。現在日本は高齢化が急速に進んでいて、高齢者の健康維持が大きな問題になりつつあります。高齢者には腎虚が大なり小なり認められるため、今後八味地黄丸の役割は益々大きくなると思います。